

8	8件 (17名)	8件 (17名)
9	7件 (12名)	4件 (8名)
10	4件 (7名)	4件 (7名)
11	3件 (3名)	3件 (3名)
12	4件 (7名)	4件 (7名)
13	3件 (4名)	3件 (4名)
自由	35件 (74名)	33件 (72名)
資料	8件 (8名)	8件 (8名)

(*) 採択のうち、4件 (4名) (計画1件、自由2件、資料1件) は、未実施。

(3) 研究会

平成2年度は、「研究会」と小規模の「ミニ研究会」が以下のとおり採択・実施された。

A. 研究会

1. ニホンザルの現況研究会
2. ニホンザル集団における優劣・順位の再検討
3. 遺伝・生化学的手法による霊長類の種分化と系統に関する研究
4. 第20回ホミニゼーション研究会「第20回記念・ヒト化と人間化」

B. ミニ研究会

1. ニホンザルの古生態地理
2. 霊長類のアレルギー疾患とその実験モデル
3. 霊長類の視覚機能
4. 霊長類の聴覚と音声

2. 研究成果

A. 計画研究

課題 1

計画1-1:

宮城県におけるニホンザルの分布、個体数の現状と歴史的変遷およびその要因についての研究

伊沢 紘生 (宮教大)

遠藤 純二 (東浜小)

庄司由美子 (岩沼小)

宮城県下のニホンザルの過去の分布復元、現在の分布、群れの数、個体数の推定等、これまでの研究成果を基盤に本研究が開始されたわけだが、2年目の本年度は以下の項目について調査を行っ

た。

① 金華山のニホンザル5群については過去9年間継続調査を実施してきたが、本年は個体数増減にかかわる要因の一側面をさぐる目的で、5群の出産数や出産率の変化、アカンボウが出生後1年以内のどの時期にどのくらい死亡するかを集計し、それらと全個体数の変化や、気候変動、主要食物の生産量の年変化等との対応を考察しまとめた (伊沢1990, 宮教大紀要)。

② 上記分析から金華山ニホンザル個体数増減に深く関与していることが明らかになった食物について、生産量を知る目的でシード・トラップを50ヶ所設置し年間を通しての資料を収集した。現在収集資料の分析中である。

③ 前年度に調査した奥新川、二口、七ヶ宿の3地域で群れの個体数調査を実施したが、それらを本年度再調査し、個体数の正確な把握と遊動域の変動の把握に努めた。それらの地域での植生調査も併せて実施した。

④ かつてサルが生息し、1985年のアンケート調査で群れの生息情報がなかった地域、北上高地について本年度はハナレザルの出現状況についての詳しい聞き込み調査を実施した。

⑤ これまで生息が報告されていなかった鳴子町の里山でサルの生息が確認された。しかしオトナのメスとそのコドモの2頭のみで集団であり、現在その由来について聞き込みを含めて調査中である。

⑥ 同時に、上述した地域でのサル狩猟の歴史や森林伐採の歴史、開発の歴史等の資料を収集した。これらの作業を次年度も継続することで、それぞれの地域におけるサルの生息状況の変遷とその原因を明らかにする予定である。

計画1-2:

熊本県における野生ニホンザルの分布調査 2

——球磨村と錦町を中心に——

藤井尚教 (尚綱大)

熊本県における野生ニホンザルの分布状況は、1982年よりの調査で球磨郡川辺川流域と阿蘇郡南外輪山一帯が二大中心地になっていることが判明しているが、これら以外に球磨郡の錦町を中心とする大平山一帯と、球磨川右岸の球磨村の両地域においてはこれまで1集団しか見つからず、2集

団の存在を示唆する未確認の情報があるのみであった。本調査では両地域における分布状況を把握することを目的とした。

錦町を中心とする一帯では大平川の東岸の尾根の温迫峠を行動域の東限とし、西は曲がり谷一帯をその西限としている大平グループと、曲がり谷から藤尾谷を東限として吉市段塔町に現れる段塔グループの2集団が見いだされた。

大平グループはこれまでの目視によるカウントでは30頭を越えないけれどもその実数は60頭以上と思われる。熊本県下全域で猿害を起こしていないのはこのグループのみである。町当局もこの状態を守るために大平山山系の国有林伐採反対の陳情を営林署に行い続けている。というのも、錦町は熊本県有数の梨の栽培地であって、人里には梨園が連なっているからである。

段塔グループは昔からいたようで今は廃校となった段塔小学校にもしばしば姿を見せていたといわれているが、今では国道221号線沿いの人吉市大畑町柴笠に現れるだけではなく、国道を越えて大畑町小河内や大野溪谷近くまで出没して被害を起こしている。グループの個体数はこれまでの観察やVTRの記録から判断すると大平グループよりは少なく、30～40頭と推定される。

球磨村では中国川と小川に挟まれる地域に大槻グループが生息していたが、今回の調査で、中国川周辺への出没が急減し、代わって、人吉市上原町馬水や尾曲での椎茸に対する猿害の急増と、同時に2km離れた馬水と尾曲に集団が現れていたことが確認されて2グループの存在が判明した。

大槻グループはその個体数は60頭以上の大きさであるが、もう一つはこれまでの観察例から約20～30頭の小さな集団でその行動域は小川下流と馬水、尾曲である。このグループは最初の発見地名をとって糸原グループと命名する。

計画1-3:

ニホンザルの分布と個体数と生息環境—群馬県奥多野地区および霧積・妙義山系における調査研究

上原貴夫(長野県短大)

群馬県奥多野地区とは一般的に多野郡上野村、中里村、万場町周辺をさす。群馬県南西部にあたり、天丸山、二子山などの稜線をはさんで埼玉県秩父郡と接する。全体として山容は急峻であるが広葉樹林も多く残されている。しかし、杉、カラ

マツなどの植林も行なわれている。

野生ニホンザルはこの地域としては上野村に多く生息、遊動している。その主な地域は西から品塩山北面を中心とした中ノ沢一帯、神流川沿いの浜平およびその上流部、中里村との境界近くの野栗沢一帯である。個体数の確認は山も深く、人家も少なく従って目撃報告等も少ないため困難が伴なう。そのため、実際の観察や聞き取り調査に加えて食痕、糞塊等の生活痕による推定も含めると、先の中ノ沢周辺では20～25個体が遊動している。主な遊動域は、品塩山北面からマムシ岳南面の神流川の支流の一つである日向沢、カマガ沢、猿巻沢等に沿った地域であり、時には中ノ沢の集落から三岐の集落にかけて遊動する。浜平から上流の神流川沿いにかけてはやはり20～25個体が遊動する。野栗沢においては埼玉県境に近い上流部にかけて30～40個体が遊動している。これらの群れは、冬から春先にかけて主に集落近くを遊動し、夏から秋にかけては山中を遊動するという特徴を持っている。この他に、離れザルの目撃が、中里村一帯から万場町の中里村境近くにかけての一帯において報告されている。奥多野地区においては、特に野栗沢一帯を中心として埼玉県境を越えた秩父における野生ザルとの関連が窮える。霧積・妙義山系においては依然として山を降りる傾向が続くとともに、新たな地域への出没もあらわれてきている。特に、霧積山系では本来の生息地である山中で減少し、一部が長野県軽井沢町に定着するとともに、群馬県側においては山麓の集落地に多くの野生ザルが遊動する現象となってきている。これには山中における高速道路や高圧鉄塔、新幹線工事などが影響していると考えられる。両山系では更に新たなゴルフ場開発などが予定されている。また、猿害対策も有害鳥獣駆除隊員の増員などによって強化され、野生ニホンザルの生息は一段と厳しい状況となっている。

計画1-4:

中国地方の野生ニホンザルの分布と個体群の動態

上田 丞・林 勝治(宇部短大)

田中 浩(大津高)

村田 満(三田尻女子高)

吉岡龍太郎(下松工業高)

村崎修二(猿舞座)

小村洋子(益田高)